

県民全体で支えた

「あすなる国体」

中園 裕

(地域生活文化課
県史担当 総括主幹)

1977 (昭和52) 年に開催されたあすなる国体。同一県で冬季・夏季・秋季の大会を開催した



東回り西回りのリレー隊が県庁前に集まる。この後集火式が行われた。1977 (昭和52) 年10月1日。青森県所蔵県史編さん資料

史上初の完全国体だった。

けれども青森県では、前年8月が異常な冷夏となり、豊作を期されながら冷害の痛手を被った。冬季国体を迎える1月から

2月にかけて津軽地方は大雪となり、青森市で歴代2位の積雪を記録。「昭和52年豪雪」として、後々まで語り継がれる災害となった。

誘致に名乗りを上げてから

足かけ12年。ようやくつんだ国体だった。開催前に災

難を受けた県民にとっては、暗闇の中で光を見出したような思いだったろう。

このため県民の間で国体を盛り上げる気運が高まった。より良い県民性の伸長と、明

るく豊かな郷土の発展をはかるため、自治体ごとに花いっ

ぱい運動やスポーツを楽しむ運動などが展開された。

こうして迎えた冬季大会。八戸市でスケート、大鰐町で

スキーの両大会が開催された。青森県では、雪が少ない

三八上北地方はスケート、雪

の多い津軽や下北地方はスキーが盛んだ。選手たちの活躍は県民を大いに喜ばせた。

夏季大会では水泳やカヌーなどの競技が行われた。そして最大の大会となる秋季大会を前に大会

旗・炬火リレーが催された。競技会場のある市町村は県全体の3分の1程度。このため県全体での盛

り上げを期待し、67市町村すべてを巡回するリレー大会が企画された。

青森県内を東西二つのコースに分け、リレー隊員は各市町村で選

出。性別や年齢制限を設けず、幅広い層から募った。中学生や高校生が多かったが、60歳代の男性

や主婦も参加するなど、老若男女の参加できた点が、県民の祭典であることを物語っていた。

1週間にわたって県内を巡った大会旗と炬火は、最後に県庁前で

集火され(写真参照)、翌日「あすなるの火」となって開会式会場の

総合運動場へと運ばれた。

開会式では挨拶や儀式のほか、青森県の歴史や文化に因んだレク

リエーションが行われた。十和田

市大深内少年駒踊り保存会の子どもたちが演じた駒踊りは評判を呼んだ。真打ちを務めた高橋竹山の津軽三味線は大観客を魅了した。

後半に披露された集団演技では、あすなるヒバの造形を演じた女性たちや、赤と黄の衣服を着て、りんごの造形を演じた青森市内の園児たちが大変好評だった。そして演技の最後には、

弘前ねぶたと青森ねぶたが登場。会場は夏祭りのような熱気を帯びた。

国体終了後の1980 (昭和55) 年に、「青森ねぶた」と「弘前ねぶた」は国の重要無形民俗文化財に指定された。指定に際し、国体の開催は何らかの影響を与えたと思う。

ヤマセや豪雪に悩まされてきた青森県。しかしスケートやスキーを楽しむことで寒さや雪を克服してきた。それらを大会で生かせることは意義がある。

大会の裏方を支えた県や市町村職員、そしてボランティアたちの活躍についても忘れないで欲しい。スポーツ大会は選手だけでなく、いろいろな人たちの努力と情熱がなければ成り立たないからだ。あすなる国体は県民全体で支えた大会だったのである。